

## 「悔い改めなければ滅びる」

2015年09月12日

ルカによる福音書 13章1節～5節。ちょうどそのとき、何人かの人に来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

主イエスが群衆に語っていた時、数人の者たちが来て、ローマの総督ピラトはガリラヤ人を殺害し、その血をいけにえの動物の血と混ぜたという事件を報告した。ピラトは強権を持ってユダヤを10年間も支配した総督であった。聖なるエルサレム神殿の財宝を水道工事費に充てたことに、ユダヤ人は怒って暴動を起こした。ピラトが彼らを殺害した事件は知られている。ガリラヤ人の血といけにえの動物の血を混ぜるような事件があったかどうか記録にはない。主イエスは、事件の報告を聞いて「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない」と答えている。また、シロアムの塔が倒れ18名が圧死したが、この事件に関しても「エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない」と言っている。

二つの事例はユダヤ人の宗教理解を背景にしている。彼らは罪ある者が災難を受けると考えていた。モーセの十戒の第二戒は「偶像礼拝」の禁止であるが、「あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問う」と、罪は後裔にまで及ぶと言っている。また、ヨハネ福音書9章2節では「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と、罪が彼を盲目にしたと捉えている。因果応報の考えである。主イエスは、死に至った二つの災いに関し、ガリラヤ人やエルサレムの住民が「罪深い者だったと思うのか。決してそうではない」と、因果応報の宗教理解を否定している。そして「言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と、悔い改めないことが滅びを招くと言っている。

ルカ福音書は「悔い改め」を強調している。悔い改めは方向転換という意味である。神なしとする言動から、神を信じ、神に向き合う生き方に転換することである。神への信従は具体的には、どういうことなのか。悔い改めて「いい子になりなさい」ということではないだろう。本多哲郎神父は、主イエスの生涯から「低みに立つ」ことであると解釈している。理解できる。悔い改めは「自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」という御言葉を受け入れることではないだろうか。その者は滅びることなく、神の命に与って、真に生きる者とされる。パウロは、フィリピ書3章10、11節で「わたしは、キリストとその復活の力とを知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、何とかして死者の中からの復活に達したいのです」と記し、主イエスの十字架と復活に結びつくことであると捉えている。